

アテネの森で巻き起こる、 「泣きたいぐらい滑稽な」



ウィリアム・シェークスピア
William Shakespeare(1564~1616)

**喜劇はまるで悲劇のような悲しさをもち、
悲劇はまるで喜劇のような滑稽さをもつ。**

シェークスピアの作品に登場する様ざまな人物。善人、悪人、恋する人、裏切る人、幸せに酔いしれる人、絶望にもがき苦しむ人、運命の糸に翻弄される人…。

それら一人一人の葛藤や喜怒哀楽は、時代の違いこそあれ現代に生きる私たちにとっても大いに共感できるものです。舞台上で繰り広げられるドラマも、一見別世界の絵空事のように見えても、実は現代との共通点を多く発見できるのです。

シェークスピアの戯曲は、大別すると喜劇と悲劇に分けられますが、どちらにも共通しているのは彼の風刺精神です。「泣きたいぐらいに滑稽」「笑ってしまうほど悲しい」このような世界を構築したシェークスピアは、物事を見る洞察力、人間を見る観察力、そしてそれをみごとに舞台上で表現してみせる創造性に優れた作家と言えます。



恋の魔法ではじまる シェイクスピアは



多彩なミュージカルナンバー(MUSICAL NUM)

M1『OVERTURE』

M2『恋の魔法I』

M3『男の立場』

M4『DANCE/妖艶』

M5『片思い』

M6『タイターニアI』

M7『理想の女』

M8『舞い上がる二人』

M9『恋の魔法II』

M10『舞い上がる二人～可愛